

地域内外の協働による「関係人口」の創出

～群馬県中之条町での活動を事例に～

1881038 住山智洋 指導教員 藤掛洋子教授 副指導教員 高橋弘司准教授

【背景と目的】

日本は今、人口減少が深刻な社会課題である。少子高齢化が進み、特に地方では過疎化や衰退が深刻化している。その中で地方創生分野において重要視されているのが、「観光以上、定住未満で地域に多様に関わる人」と定義される¹関係人口の存在である。よそから地域づくりに関わる関係人口こそ、地域の持続可能性を伸ばす鍵とされ、その創出が官民一体となって目指されている。

しかし、関係人口に関する考察や研究が増える中で、様々な課題も指摘されている。その内の1つがよそ者と地域とをつなぐ「関係案内人」の不足である。

本研究は、地域内外の人々の協働より関係人口が誕生する過程を明らかにし、地域内外それぞれに関係案内人が存在すること、その必要性を提唱することを目指す。

【研究対象地域と方法】

本研究は、群馬県中之条町において地方創生に取り組む団体「グローバルな仲間たち」の活動を事例にする。筆者も関わりを持たせて頂いた活動である。団体へのアンケート調査から、活動参加後に町との関わりが続いた人を探し、半構造化インタビューやコーディングを用い、よそ者と地域との出会いやその後の関わり継続の鍵を探った。

【調査結果・考察】

イベント参加者と町との出会いには2つのポイントがあった。1つは参加者らにとって、団体のイベントが町の存在を知るきつ

かけになっていたことである。もうひとつは「中之条町だから」という参加動機ではなく、イベントやコンテンツ内容に惹かれて彼ら・彼女らが参加していたことだ。この点は一見、地域との関わりを感じにくいだが、町が果敢にコンテンツ実施に挑戦した努力の結果と解釈した。

次に、参加者らと町のその後の関わりが続いた鍵には、地域住民らの主体性、アプローチがあることがわかった。イベントで出会った農家の元に実習で再訪し、町のイベントのSNSアカウント運用も担当した人物は、「来る者拒まず」の温かい姿勢が気に入り、また戻りたいと感じていた。また、イベントを機に町と出会い、町の地域おこし協力隊にまでなった人物は、地域の人たちからの誘いが絶えずあったからこそ、信用して着任することが出来たと強調していた。

【結論】

よそ者と地域とが結びつくには、地域内外の人々による協働が重要である。今回、町との出会いを与えた団体の立ち位置は、フィールドを持つ大学、NPO、企業などにもあてはまるだろう。彼ら・彼女らが地域との出会いをよそ者へ提供し、住民らが受け入れる中で信頼関係や愛着を形成していく。こうすることでよそ者は地域と結びつき、関係人口になる可能性があるということが本研究で示せた。そして、地域内外それぞれによそ者と地域とを繋ぐ「関係案内人」は存在し、双方による協働が、関係人口創出に向けて重要であると本研究で結論付けた。

¹ 総務省「関係人口とは」『関係人口ポータルサイト』

(<https://www.soumu.go.jp/kankeijinkou/about/index.html>, 2021/7/30 閲覧) を参考。